モスクの聳えるユスキュダルの波止場は，情緒が一杯である。だが，思っていたよりはるかに近代的で，豊かさを感じた。ここは，アジアの端なのである。だが，そこで見たものは，アジアの端ではなくて，私にはヨーロッパなのであった。少なくとも，東アジアや東南アジアで感じられる控え目の対人関係はあまりなくて，明るく，そして自己主張の強い西洋の感じで一杯なのである。

街の写真をとっていたら子供が寄ってきた。子供の数はどんどん増えて，やがて２０人を越した。写真をとったら大喜びで，いろいろなゼスチャーをしてくれる。子供たちの顔は，どうみてもヨーロッパ人に近い。アリアン系のイランよりも，ここの人たちの方がよほどヨーロッパ的である。

ボスポラス海峡の，そのあまりにも美しい景色を見ていると，多くの人が地中海に憧れる気持ちがよく分る。ここは青森湾と同じ緯度だというのに，どうしてあのように明るいのだろうか。

イスタンブール側へ戻って，歴史を秘めた旧市街を歩く。木造の家はどんどん煉瓦の家に建てかえられている。煉瓦の家は，それほど立派なものばかりでないのに，色彩が明るく豊富なので，南ヨーロッパを感じさせる。狭く，瓦礫の多い坂道でも，いいかげんではあるが歩道がついている所が多く，その点などでもヨーロッパ的である。市街をとりまく囲郭は，コンスタンチノープル最後の時のオスマントルコの攻撃によって大きな破壊を受けたのであるが，今はその後の歴史の流れの中で破壊が進行している。相当数の人たちが，廃墟のような城壁を利用して住んでいる光景などは，日本では全く見られない景観である。

街には大声を張りあげて品物を売る男たちが行く。そして，馬が荷車をひいて走る。だが，それらをおおいかくすように，自動車が走り回る。トルコ服より洋服が多くなり，中心商店街を歩く人たちの感じは，パリにそっくりである。有名なバザールも，中味はずい分と近代的で，もうアラビヤンナイトの時代は過ぎ去ってしまったようである。東アジアからの旅行者にとって，イスタンブールは「古きよきヨーロッパ」であったのである。

毛　沢　東　の　写　真

内　藤　博　夫

昨年の１０月，木曾の親戚の法事に出席したついでに漆器の産地として知られている木曾郡楢川村大字平沢というところを訪ねてみた。平沢は木曾の山中を流れる奈良井川の河谷にあって，旧中仙道に沿って発達した人口1,９００人足らずの集落である。中央線木曾平沢駅を下車して部落に入

ると，一見して漆器産地とわかるほど，道路の両側には漆器店が多い。村といっても平沢部落に関する限り漆器の町と言ったほうがピッタリする。漆器店は概して店構えも立派で新築されて間もないように見受けられた。店舗が立派で品数も豊富である割には通行人も客の数も少なかったのは意外であった。役場の人の話では，平沢漆器の販売方法は行商による直接取引が主で店頭を飾るのはデモンストレーションとしての意味の方が強いとのことであった。漆器店といっても販売だけを行なうのではなく，製造業者をも兼ねている。したがって店舗の他に土蔵かそれに相当するものがあり，そこで漆器の製作が行われるのである。部落ぐるみ漆器に従事しているような印象を受けたので，漆器業の実態をなおくわしく知りたいと思い，村役場と漆器協同組合を訪ねてみることにした（村役場も協同組合も平沢部落にある）。

役場では漆器工業の概略を伺ったのち，役場の前にある漆器博物館を見学した。そこには漆器の製造工程を示す図や原材料と道具の実物が展示されてあった。なかでも興味をそそったのは漆器の塗料になる中国産の漆（うるし）である。漆は木の樽に詰められていて，表面には見事な筆致の赤い字で，「中国人民は日本人民の真の友人である」と書かれたステッカーが貼られてあった。新中国の意気さかんなところが感じられた。

協同組合に行ってみると玄関先に「日中国交回復促進」と書かれたのぼりが立ててあった。組合の事務室に入ると，驚いたことに毛沢東の写真が額に入って壁に飾られてあった。

中小企業者の間では日中貿易を望む声は強いものがある。それは政治的立場を越えて，商売を続けていくために大陸の市場を必要としているからである。ところで漆器工業では原料としての漆の９０％は中国からの輸入に依存しているという。したがって，原料の確保という点で日中国交回復は業界あげての要求とならざるをえないのである。昭和４０年７月に巡検で会津若松市の漆器工業を見学したことがある。会津若松では漆と木材を原料とする伝統的漆器のほかにプラスチックと化学塗料を原料とする新しい「漆器」が生産されている。このプラスチック漆器の生産がはじまった直接の契機は中国からの漆の輸入が一時期途絶えたためであるという。プラスチック漆器の生産は年々さかんになり，会津若松市の郊外に工業団地が建設されるまでになっている。プラスチック漆器の出現を漆の輸入途絶だけから説明することには無理があるであろう。この背景には技術革新が漆器工業に及んだことや，消費性向の変化，伝統的漆器の生産性の低さなども考えられるからである。しかし，原料を国内で安定して確保できない事情も無視することはできない。会津若松漆器協同組合のある役員の人は中国から漆を買付けるために大変な苦労をして香港経由で中国に乗込んだ経験を話してくれた。

平沢産地にはまだプラスチック漆器工場はない。ここはむしろ伝統的漆器を売物にして生きてい

こうとしている産地なのである。それだけに漆の確保は死活の問題となる。毛沢東の写真は日中両国間の不正常な状態に対する業者のあせりのあらわれであろうか。そのように考えたとしても奇異な感じは残る。文化大革命下の中国ならいざ知らず，この日本において，貿易の促進という要求がそのまま相手国の指導者に対する崇拝とは結びつかないからである。組合の人に毛沢東の写真を飾る理由をたずねてみようとも思ったが，何んとなく失礼にあたるような気がしてついにそのままにしてしまったのは残念であった。毛沢東の写真が飾られた理由はともかくとして，漆の国内自給率が１０％であることに問題がある。平沢の組合からいただいた資料によれば，徳川時代にこの付近を統治していた尾張藩では漆器生産を保護奨励し，材料のヒノキのほかに漆樹についても担当者をおいて植林させたという。漆樹の育成は現代の日本の林業にとってどれほどの意義をもつのか筆者はつまびらかにしていないが，漆器工業にとって重大な関心事であるばかりでなく，国内産業の保護，あるいはつりあいのとれた経済の発展のために，短期的な採算を度外視しても国が責任をもって行わなければならない事業の一つかも知れないのである。

キャンパスの花（承前）

貝　山　久　子

夏になると図書館へ行くのがたのしい。それは図書館前の芝生の中にねじ花が可愛い花を咲かせるからである。ねじ花はその名前の通り，丈１０～２０センチほどの茎にピンクの筒型の小花がぐるりとラセン状にねじれてつく。まき方は右まきも左まきもあるようだが，大体１週間位しか花の期間がないので，一寸ごぶさたしているとすぐ終ってしまう。まだかまだかとためつすがめつ中腰になって芝生をすかしてみる私を，学生が不思議そうに眺めて通りすぎる。ねじ花は学生会館の横の芝生の中にも沢山あり，ラン科の多年生草木で，古今和歌集の〝みちのくのしのぶもじずりたれゆえに，みだれそめにしわれならなくに〟のしのぶもじずりに似ているので，モジズリ，モジバナとも云われているそうな。由緒のある古い植物といえよう。もう一つの夏の花は夾竹桃である。これはプールのわきと，小学校の花壇に比較的大きな株がある。夾竹桃はやさしげな名前，姿に似ず公害に強い植物のよしであるが，やはり戸外においてみる花のようで，花瓶にさすと思いがけない程のきつい香がして，何となく落着かない。８月のキャンパスはいろどりに乏しく，私のせまい行動半径では夾竹桃のほかハナツクバネウツギの淋しそうな花が咲いている位で，木々のみどりのみ